

## イエスこそ私の光

丸山 勉

[聖書] ヨハネによる福音書 8章 12～20節

イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」それで、ファリサイ派の人々が言った。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれをも裁かない。しかし、もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。なぜならわたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである。あなたたちの律法には、二人が行う証しは真実であると書いてある。わたしは自分について証しをしており、わたしをお遣わしになった父もわたしについて証しをしてくださる。」彼らが「あなたの父はどこにいるのか」と言うと、イエスはお答えになった。「あなたたちは、わたしもわたしの父も知らない。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知るはずだ。」イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。(8:12～20)

私たちは「昼」と「夜」が織りなすリズムの中を生きています。それは「光」と「闇」が必ず交互に巡るということであり、私たちはそれを当然のことに思っています。しかし「創世記」の初めを見てみると、それは「当然」のことではないことが分かります。

**「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。」**

「光」というものは、初めからあったものではないということ。「光」も神様がそのご意志を持って創造されたもの。「光」が誕生する前にあったものは、深い「混沌」と「闇」であって、世界はまずそれに覆われていた。そして、この「混沌」と「闇」を、神様は打ち破られたのです。「光」を創り出すことによって！そこから、あらゆる「命」も創造されていった。人間もそうです。

イエス様は今日のヨハネ福音書 8章の箇所の中で「わたしは世の光である」とおっしゃった。それは、今申し上げたようなスケールの大きさを持った言葉として聴くべき言葉

ではないかと思わされる。「わたし(こそ)が光なのだ。わたしはこの世界のための光であり、またあなたという存在を生かす命の光なのだ」とイエス様はここでおっしゃっている。

8:12のアタマに「イエスは再び言われた」とある。では、イエス様のその前の言葉とは何か。それは先週読んだ7:37～38の言葉に遡る。8章でもまだ「仮庵の祭り」の終りの日が続いていると考えてよい。どうも7:53から8:11までは後代の挿入物語であるだろうと言われる(それにも大きな意義があると思います)。「仮庵の祭り」は、「水」と「火」の祭りでもありました。昔イスラエルの民がエジプトを出てから荒れ野で水に困窮した時、主なる神が岩から水を湧き出させ、そのテント(仮庵)を張りながら前進していった旅路を想起して、エルサレム神殿の祭壇に水を次々に汲んでは四方に流れさせる儀式があった。ユダヤ人たちはその場で歌い踊ったという、謂わば「水の祭」です。その場で主イエスは言われました。「**渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。**」(7:37～38)

もう一つの「火の祭」と言うのは、この神殿の宝物殿がある庭には四隅に巨大な枝状の燭台があって、夜になるとそこに煌々と松明の炎を掲げる。その巨大な光にユダヤ人たちは、出エジプト後の先祖がやはり荒れ野を前進する時に、主が「**昼は雲の柱、夜は火の柱**」(出エジ13:21)を持ってその旅路を導かれたことを重ね、主を讃えたのです。ですから「火の祭」です。「光の祭」と言ってもよい。恐らく人々がその光を仰いでいる時にイエス様が二つ目の招きの言葉としておっしゃった言葉がこれです。「**わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。**」(8:12)

“渇いている者はだれでもわたしのもとに来よ”という言葉と、“私こそがまことの光なのだ、あなたを生かす命の光なのだ”という言葉は、正に人間に対する神ご自身の招きの言葉として迫力をもって私たちに響いて来ることを感じます。これは、イエス様の決死の覚悟を持った言葉ではないでしょうか。「わたしは」(エゴ)という言葉をやたらと使っている。

今日は「光」ということを考えてみたい。皆さんは「真の闇」というものを経験されたことはありますか。文明社会に生きてしまっている私たちはまず経験しないのではないかな。

私の間接的に知っている方で、北海道の旭川郊外の田んぼの脇に、手作りの家具を作る小屋と住まいを建てられた方がいて、「ここに住むようになって初めて本物の“闇”というものを体験した」と言われました。私も日本アルプスや八ヶ岳の山の頂で朝を迎えたことがあります。夜明け前の山は本当に真っ暗ですね。それだけに、太陽が昇

る前、稜線が次第明るくなっていくその光景がどんなに美しく感動に満ちているものか！と思わされた。

私たちは、この時代に生きる者として、物理的な「闇」をほとんど経験しない者。電気がない生活、光がない生活と言うのをなかなか想像できない中にいると言えます。と同時に、実は、聖書が語る「闇」と言うものはさらに、よく分からない者なのではないか。それは「霊的な闇」と言えるものです。

この8章でも、宗教的に熱心なファリサイ派の者たちは、イエス様の「わたしは世の光だ」という言葉にむしろ反発をしている。「あなたは何様なのか!?!」という思いがあっただろう。「わたしはこの大きな松明にも勝るこの世の光なのだ」と主は言われた。ファリサイ派は「あなたの自分の言いたいことを言っているだけだ、あなたの言っていることは誰も証明できない」というようなことを言いました。しかしイエス様は驚くべきことを言われます。「わたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。」と言い、「あなたたちの律法には、二人が行う証しは真実であると書いてある。わたしは自分について証しをしており、わたしをお遣わしになった父もわたしについて証しをしてくださる。」と。これは、ご自分と父なる神様が一つなのだ、わたしはこの父なる神から、この世の人々を救うために遣わされた者(メシア)なのだ、という宣言に等しい言葉です。これは当時の宗教家からすれば、神様への冒涇でした。神が人間の姿を取るなどということは狂気の沙汰のようにしか思われなかった。

イエス様のこの大胆な言葉には、イエス様の逃げない“本気”がある。「この場でこれを言わなければならない」という、逆る熱い思いがないと語れない言葉です。「わたしは世の光」。これは、私は抽象的な、頭でっかちの哲学的な言葉ではありません。イエスと言う「光」は、「闇」に中にいる私たち一人ひとりを照らし、捜し出す「光」、行動する「光」です。

思い出してほしいイエス様の譬え話があります。10枚の銀貨の話です。ルカ 15:8～10。

「ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

当時のパレスチナの家は、窓も少なく、昼間でも暗かったと言います。結婚のために備えていたのか、女の人が持っていた大切な銀貨の一枚が家の中のどこかに転がり、みつからなくなってしまった。どうしたか。「光」を灯し、隅から隅まで捜し出しました。一

枚だからいいやとは思わなかった。絶対に捜し出す！という執念。時間をかけて探したでしょう。ですから見つかった時の喜びは大きかった。近所の者や女友達を呼んで一緒に喜びを共有した。普通に聞けば、ちょっと大げさな話です。けれども、これが神様の、人間に対する思い。イエス様はおっしゃいました。「言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」—これは、神様による、私たちの救済の物語なのです。

—私たちは、この「失われた銀貨」でした。失われた銀貨は、暗闇の中にいます。そして失われた銀貨は、自分からは持ち主のもとに戻ることが出来ません。見出されなければ、そのまま。埃の中に埋もれるでしょう。しかし「光」がやってきました。「光」が歩いて来ました。それが主イエスです。主イエスは、私たちが転がり落ち、戻るに戻れないその状況を憐れみ、そのまま放置しておくことは出来ないと、自らが身を低くして、埃の中に見えなくなっている私たち罪びとを徹底的に捜されるお方です。「光」が来たとはそういうこと。

なぜ、そこまでして主は私たちを捜されるのか。それは真の「闇」の怖さを、私たち以上にご存じの方だからではないでしょうか。それはどのような「闇」でしょうか。—それは、「神がいない」、「神がわたしを捨てられる」という闇です。それを主は、私たち以上に、いえ私たちに代わって、あの十字架上で体験されました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ 27:46)と。あの、暗くむごたらしい十字架は、私たちにとって「救いの光」そのものです。旧約聖書のイザヤ書でもイザヤはこの十字架の主の姿を預言されているかのよう。「彼の打たれた傷によってわれわれはいやされた」(イザヤ書 53:5 口語訳)と。このキリストという「光」を受けることによって、私たちは自分が実はどのような中から助け出され、今救い出されているのか、その恵みの大きさを知るのである。

私たちは、この光に照らされる前は知りませんでした。自分が実は暗闇の中を歩んでいることを。そこに安住していたのです。自分の人生は何も変わらないと、運命的に思っていました。そんなことはないのです。そんなことはないのです。暗闇はいつも私たちに追いかけて、虜にしようとします。いろんな暗闇があるでしょう。今申しましたような「諦め・絶望」という暗闇、或いは「神などいない」という暗闇。何かに依存しなければ生きてゆけない、依存対象を「私の神様」にしてしまっているという暗闇。それらは手ごわいものです。

けれども、そんな私たちに主イエスは「光」として来て下さって招くのです。「わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」。ただ私だけを見ていればいい。そうすればあなたは命の光を持つ。イエス様はおっしゃるのです。「光あれ！あなたの人生

に！」——このヨハネ 8 章の前半には、罪を犯した女性が皆の前に引っ張り出されて来たけれども(女性も裁かれることを覚悟していたことでしょう)、イエス様はこの女性に言われました。「わたしもあなたを罪に定めない。もう罪を犯してはいけない」と。——イエス様の光は、赦しの光です。死に迫いやる裁きの光ではなく、私たちを生かす、冬の日の、陽だまりのような光です。

この光は、弟子たちが集まって祈っていたあのペンテコステの日に、炎のような形になって「聖霊」として信じる者たちに注がれ、彼らを内側から変えました。彼らは弱さを抱えたままで、自分たちの個性はそのままに尊重され用いられながら、また、神様のもとに何度でも立ち戻らされながら、しかし、神様が引っ張っていかれる所に大胆に、そして喜びをもって従っていったことを私たちは知らされています。「命の光」を持ったからです。私たちも同じです。どんな暗く思える中を歩もうが、いつも主イエスというまことの「光」が一緒です。まず「光」あって、この世界は、人間は作られました。光に支えられ、光に導かれる私たちの存在であるのです。私たちを覆うかに見える闇は、もうイエスという「光」に打ち負かされているのです。このことを信じ、歩んで行きましょう。主イエスこそ、私の光として。

お祈り致します。